

第二章 「できることから始めよう」

どうにか無事にキャットテイルXの司令室に戻ってきていた。白猫に案内されるままに小高い丘まで登ったところで、目の前が唐突にマーブル模様が変わって、気がついた時にはキャットテイルXの医務室のベッドだった。どうやら、私は意識を失ってここで3時間あまり寝ていたらしい。

既に司令室にはグレン大佐を含め全員が戻ってきていた。しかし、あまりにも大勢の人間が司令室にいるため少々窮屈にも感じる。バルチェがどうやら別の部屋を用意しているようだった。

「ワキさん、身体のほうは大丈夫ですか？」

柴野さんがいち早く私の存在に気がついて近寄ってきた。もしかすると気にかけてモニターしていてくれたのかもしれない。

「ああ、なんとかね。」

なんとなく頭の中を見透かされているようで居心地は悪い。しかし、今はそんなことを気にしている場合じゃない。この状況下でおそらく一番的確に物事を見ることができているのは彼女しかない筈だから。

「My aはどこにいたんだ？」

「あら、あそこまで行って気がつかなかったんですか？」

意外とでもいう顔をして、クスクス笑い出す。

「ワキさんだって猫の姿だったじゃないですか。」

あ…、そういうことか。言われてみれば簡単なことだ。私はあまりにもMy aという女の子の姿を追い過ぎていただけなのだ。柴野さんの言うとおりに、たぶん私が単に気がつかないだけでMy aは何かの形状を借りて確かにそこにいたに違いない。

「ファズアース曲線という言葉をご存知ですか？」

「いや、初めて聞いた。」

「ワキさんのようにファズアースに願い事をした場合に、ファズアースとの距離に反比例してその影響度合いが変わるのを表したものだそうです。ファズアースの能力は元の個体が持っている能力を消去する効果が確認されています。おそらく、ワキさんの元の能力は既に消えうせ、ファズアースによって得られた効果はファズアースとの距離に従い低下しているんでしょうね。」

「そうか…。」

まあ、薄々気がついてはいたが、連邦政治局に関わらなければ問題視することでもなかった訳だから仕方が無いところだろう。でも、それがはっきりとしたんだ、ここで自分ができることをきちんと把握しないと。できることから始めるしかないのだから。

「場所をフリーエリアに移します。皆さん、移動してください。」

バルチェがさほど大きくもない司令室中には十分すぎるほどの大声で叫んでいる。みんな、なんとなく顔を見合わせ、ゆっくりと移動を始める。私はグレンに声をかけようとしたが、彼はそれを望まなかったのか足早に司令室を出て行ってしまった。どうやら、まだお楽しみが残っているらしい。

フリーエリアには既に大型モニターとPOWLA IIが移動してセットアップされていた。オペレーター席には湯浅大尉が座っている。

「それでは会議を始めさせていただきます。なお、この会議は地球ともオンラインし、お互いに情報

を交換いたしますのでそつもりで発言して下さい。」

どうやら議長はクロノが行なうようだ。私はとりあえず一番隅の席に座った。私の姿は地球のお偉い方にとって歓迎するようなものではないだろうから、できるだけ目立たない所にいた方がいいと思ったのだ。

「まずは一番状況を把握していると思われるグレン大佐より、今回の問題を説明してもらいましょう。」

グレンは周囲を一度ぐるりと見回すと、私がいるのを確認して軽く頷いた。そして、大型モニターに映し出された永世議会議長と本部局長の2人の姿を確認してもう一度頷いた。つまり、これで彼の望む役者はすべて揃ったということなのだろう。

「これまで我々は2度の大きな自然現象と向き合ってきた。1度目はMR-7星の爆発、そして2度目がファズアース彗星の飛来。そこで我々は大きな奇跡に助けられ、1人の犠牲者を出すこともなくここまで来た。」

グレンが湯浅大尉のほうに合図を送ると、モニターには黒い鳥のような形をしたガス状の物が映し出された。

「我々は再度闘わなければならない、いや今度こそ奇跡などに頼らず自分自身の手で未来を切り開いていかねばならないのかもしれない。」

モニターの映像は不鮮明で、これが何なのかはまるで分からない。

「現地にいたシュレーディングアの猫によれば、この物体はマックスウエルと呼ばれている悪魔だ。有史以前よりこの宇宙に存在し、数々の惑星を破壊してきたらしい。現在とはある小惑星に封印されているが、徐々にマックスウエルの力は強くなっている。いずれ、封印が解かれるだろう。なんとしてもマックスウエルの力が開放される前にもう一度封印する方法を見つけ出さなくては、我々人類が滅びさる可能性が高いのだ。」

キャティ側にいる者はあるていどこの事を知っていたのか誰一人として声を出す者はいなかった。しかし、地球側はあきらかにグレンの言葉に動揺していた。

「そのマックスウエルとは生物なのか？」

「小惑星ごと爆発したらどうなんだ?!」

永世議会議長と本部局長の二人が同時に発した台詞だ。お互いに顔を見合わせ、そうしてもう一度発言した。

「グレン大佐、君に特別任務を与える。この件を速やかに処理するように！」

「必要な支援は地球から送るが、そのマックスウエルとやらを太陽系圏内には決して入れるな。」

グレン大佐は少しばかり難しそうな表情を作って、そして私の方をチラッと見た。

「この件はかなりの難問です。情報部だけで処理できるものではないでしょう。科学部、文化部、そしてESP研の協力が不可欠です。この3部門の指揮系統を本件終了まで私に与えて下さい。」

グレン…、いったい何を企んでいるんだ？たしかにPOWLAに関して全権を押さえるには科学部と文化部の指揮系統を掴むのが有利なのは分かっているが、柴野大尉だけのことでESP研そのものを掌握する必要などないだろうに。

地球にいる二人は、さすがにこのグレンの申し出に即答という訳にはいかなかった。

「君の意見は分かった。しかし、それを実行するには永世議会の承認が必要だ。24時間以内に回答できるだろう。」

「ありがとうございます。キャティと協力して24時間以内に準備を終了させておきます。」

グレンは形だけ頭を下げて、そこで通信が切れた。大型モニターは小惑星の映像に変わった。

「グレン、いったい何を考えている？」

私が言いたかった台詞を先にバルチェが切り出した。

「必要にして十分な人材を確保するためだ。今回は *POWLA* をかなり特殊な使い方をしないとまらないだろう。その時に全権を持つ必要がある。文化部長と科学部長とは昔から意見が合わないからな。邪魔されたくないだけだ。」

バルチェは明らかに不満そうな表情を浮かべた。私もそうだが、グレンが本心を語っているようには感じられないのだ。しかし、今はそれを追及している時ではない。グレンの言動にはかなり妙な部分を感じるが、それでも今この場で一番信用できる人物であることも事実だ。今は彼の考えに乗っかるしかないだろう。

「で、大佐にはあの悪魔の正体が分かっているのでしょうか？」

市瀬中尉がかなりイライラした様子で質問を投げてきた。

「おおよそは分かっている。封印する方法も見当がついている。我々でできるかどうかは別の話だがな。しかし、我々の目的は封印ではなく退治と言ったほうがいいだろう。あの悪魔を一時的に封印したとしても、将来に復活してしまえば同じことだ。」

「では、どうしようというのか教えていただけますか？」

「それには3つの奇跡を揃えなくてはならない。1つは空の *AVITASION*、2つ目はファズアース特性、そして3つ目がシュレーディングの猫だ。」

「ファズアース以外は比較的簡単に思いますけど、そのどこが奇跡なんですか？」

「現在使用中の *AVITASION* を空の状態にすることなど不可能だろう。また、もう一台製作すると言っても容易ではない。」

「どうしてですか？あれを作ったのは *POWLA* 研究所のシモさんでしょ。あの時だって3週間で製作した筈です。そんな困難なこととは思えないと思うのですが。」

この質問は湯浅大尉からのもの。しかし、グレンの言わんとしていることは分かる。さすがにあの時と同じようにはいくまい。

「*AVITASION* と空の *AVITASION* では状況がまったく変わるだろうな。」

地球との通信が切れているのを確認して、そうtryingみる。おそらくはこの場でその違いを分かっているのはグレンと私だけだろうから。

「ワキさん、どういう意味ですか？」

「空の *AVITASION* というのはあり得ないんだよ。データベース衛星は0では作れないんだ。最低でも1の情報が必要になる。」

「*AVITASION* は必ず情報量が0でないといけないんですか？」

「おそらくはな……。」

この辺は大よその予想はできているものの私が返答する部分ではないだろう。何とはなくグレンに視線を送るが、グレンはそれ以上答えるつもりはないらしい。

グレンがここに私を連れてきた理由は、たぶんこの *AVITASION* の問題があったせいだろう。実際の設計はともかくとしても、基本コンセプトを作ったのは私だったから。しかし、今回の要求はかなり高いとしか言いようがない。もし *AVITASION* ではなく必要な物が *ANDREA* であれば作れ

る可能性はあったのだが……。

「で、2番目のファズアースというのは居場所は分かっているのか？」

バルチェがどちらかという三好くんに向けて訊いている。

「現在の座標は分かりません。しかし、遠ざかった方向は分かっていますので追うことは可能でしょう。」

「途中で方向が変わっている可能性は？」

「無いとは言えません。一応は発信機を置いてきていますので、一定の距離に入れば確認することは可能です。」

「この広い宇宙でか？なんとも不確実な情報だな。」

バルチェの言葉に三好くんもそれ以上は答えなかった。おそらくそんなことは彼自身も分かっているのだろう。

「しかし、できることからやるしかないだろう。何もしなければ我々に未来がないことだけは確実だからな。」

バルチェの言葉にこの場にいた全員が大きく頷いた。

「私は永世議会の結論をこのまま待つつもりはない。今すぐにでも始めよう。もしかすると、これが連邦政治局における私の最後の仕事になるかもしれないが、みんなついてきて欲しい。」

グレンが珍しく弱気な言い方をする。しかし、私とその立場であつたら間違いなく言うだろうその台詞を、誰が責めることができよう。だが、間違っても連邦政治局を追われるのは私一人でいい。グレンはまだ連邦政治局に必要な人間だ。

「情報部はファズアースを追う。市瀬中尉、三好中尉、ミヨー少尉はファズアースをここへ連れてくるんだ。」

「了解！」

「文化部はシュレーディングーとの交渉役だ。湯浅大尉、柴野大尉、ミクラ少尉でもう一度小惑星に行ってコンタクトをとってくれ。」

「はい。」

「最後に科学部で AVITASION に代わる物を作ることになる。ワキ、頼めるか？」

「頼むも何も最初からそのつもりで私をここに連れてきたんだらう？」

グレンはニヤッと笑うとすぐに真顔に戻る。

「POWLA 研究所には話しを通してある。既に準備は整っている筈だ。」

「了解！」

少しばかりワクワクしている自分に気がつきながらも、意外とまだ冷静にいられることに感謝した。

第二章 「できることからはじめよう」